

柏戸の眞実

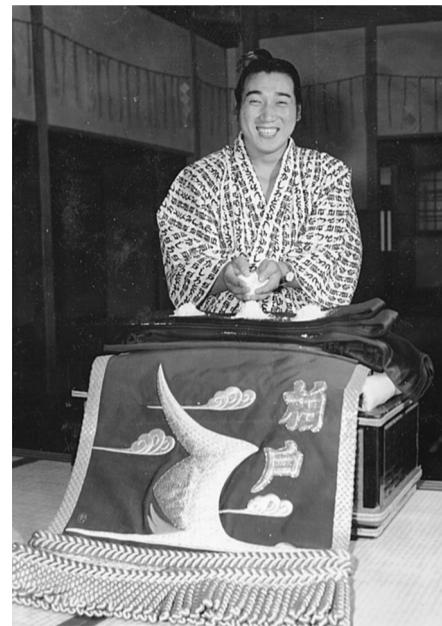


姉 喜久子が生きていたら（中）

昭和25年に嫁入り

柳引地域の東地区黒川と西地区山添の間を流れる一級河川・赤川は子どもたちの遊びと冒険の場だった。

黒川橋は今日帰り温泉「ゆくTown」のそばにあり、橋脚の下に浅瀬があり、橋脚の下に浅瀬があつた。



スをヤスで突いた。四角い「ガラス箱」は左手で持ち、

右手のヤスで水底の石に隠されているカジカを捕つた。

兄のやり方をまね、ガラス玉、メンコ（庄内の呼び名

はペツチ）でも遊んだ。

昭和25（1950）年4月19日だつた。山形市で火葬され、父

が骨壺を抱き、実家に戻ってきた。

姉急変、急性肺炎

だが嫁に行つたばかりの姉の急変が伝わってきた。

慣れない環境で体調を崩し、またに「働かない」と認めてもらえない」と無理して家

事に農作業に働いた。その

入院の手続きが取られた。

「どうして、焦って嫁に

苦しがる喜久子を見て、氣が氣でない両親の思いは終戦後、日本でも実用化され始めた解熱作用のある抗生剤ペニシリンに向かった。

東京など首都圏ではまだぶ流通してきたが庄内ではまだ高根の花。それでも父・元雄が村会議員をしていた関係があつて、役場を通じて山形市の病院に届いた

「どうして、焦って嫁に

やろうと思つたんだろう。なんでだ」両親は悲嘆に暮れた。中学卒業後、実家に置いたが、早い嫁入りが早世になつたがつたと思うと後悔しか残らなかつた。

20歳の柏戸。富樫から改名したばかりの頃だ

月、「剛や、元気でいてよ」と言い残して、19歳で隣村に嫁に行った次姉・喜久子を気遣う思いはあつたが、中学生に上がつたばかり。同級生たちとバスケットボール、サッカーなどクラブ活動に夢中の日々を過ごしていた。

うち高熱が出て、治まらないとなつた。嫁ぎ先と話し合いで、いつたん山添の実家に戻ることになった。暑くなつてくる季節で、汗はびっしょり出るのに熱は治まらない。最初は風邪の診断だったが、明らかにおかしかった。再診断で急性肺炎に変わった。症状は日々増しに悪くなつた。

苦しがる喜久子を見て、氣が氣でない両親の思いは終戦後、日本でも実用化され始めた解熱作用のある抗生剤ペニシリンに向かった。

月19日だつた。山形市で火葬され、父が骨壺を抱き、実家に戻ってきた。

◆ペニシリン 英国のフレミングが1928年に発見した世界初の抗生素。第2次世界大戦中に多くの負傷兵や戦病者を感染症から救い、細菌性の肺炎など医療現場に提供されてきた。20世紀の偉大な発見の一つとして数えられ、フレミングはノーベル生理学・医学賞を受賞した。



20歳の柏戸。富樫から改名したばかりの頃だ

嫁入りからわずか3ヶ月半

剛4年後角界入り

駅に到着したが、すでに意

識はなく、救急車で運ばれなつた4年後の29年秋場所。山添中卒業後、兄に連れられ、装着し潜っては川マ

火曜日付掲載予定